

バイオテクノロジー標準化支援協会ジャーナル No.146

SABS Journal No. 146

発行日：2024年1月18日

URL：<http://sabsnpo.org>

このSABSジャーナルは当協会を設立した東京都立大学名誉教授奥山典生先生が2007年10月11日に第1号を発行されて以来、2015年のご逝去直前まで執筆されて、毎回様々な分野にわたり溢れる蘊蓄を披露されて居られました。<http://sabsnpo.org/journal001.pdf>

奥山先生のご遺志を継いだ我々は当協会をさらに発展させて行くため、本ジャーナルをNo. 74から引き続き定期的に発行しています。また定例会もこれ迄通り継続して毎月開催し、専門家の方々に話題を提供して頂き、自由な討論を通じて勉強と親睦を深めています。コロナ禍のため2020年3月以来何度も定例会が中止となりましたが、やっと定期的に開けるようになったのは有り難いことです。

少し遅れましたが先ずは新年のご挨拶です。今年も皆さまよろしくお願ひ申し上げます。

ここまでは新年の祝辞なのですが、今年元旦の午後4時頃に北陸地方を大変な天災が襲いました。マグニチュード7.6という令和6年能登半島地震です。その後も震度5の地震が続いています。

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%83%BD%E7%99%BB%E5%8D%8A%E5%B3%B6%E5%9C%B0%E9%9C%87_\(2024%E5%B9%B4\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%83%BD%E7%99%BB%E5%8D%8A%E5%B3%B6%E5%9C%B0%E9%9C%87_(2024%E5%B9%B4)) 今日までに亡くなった方が200人以上、未だ安否の不明の方が多数あり、更に所謂災害関連死の方々も増えていくことが懸念されます。多数の家屋が被災し、避難者数は数万人と報道されています。気候変動の結果、海水温の高くなった日本海に面したこの地方は今大雪に襲われ、更なる被害が起こりつつある状況です。

地震国日本ですが、今回数千年に一度という事象も起こりました。能登半島の震源地付近の海岸がなんと最大4mも僅か数分で隆起してしまったのです。多数の船が陸になってしまった海底に‘座礁’し、イソギンチャクなどが密生している岸壁が露出した映像はまさに前代未聞です。数千万年前、日本列島がユーラシア大陸から離れ始めて以来、プレートの押し合い圧し合いの結果起こる隆起が何千年に1回くらいの頻度で発生しこの列島が形成されてきたと言われていています。

能登地方は、温泉、朝市、海産物、棚田など観光地として知られるだけでなく、農業、林業、水産業の他、輪島塗などの漆器、陶器、瓦などの伝統的産業も有名ですが、実は近年の積極的誘致もあって半導体、精密部品などの所謂ハイテク産業が多数移ってきて技術者などが集まり、世界シェア4割という企業まであるようです。こうした産業で必須な多量の水の供給や電力にクリーンルームの故障などにも大きな被害が報じられています。<https://nikkeimatome.com/?p=21010>

そして翌1月2日には救援物資等を運搬のため羽田空港を離陸しようとしていた海上保安庁の航空機が旅客機と衝突炎上する事故がありました。幸い400名近い旅客機の乗客乗員は全員

助かりましたが、海保機では機長を除き乗組員 5 人が亡くなりました。羽田空港は世界一密な飛行場だそうで、管制官や操縦士のほんのちょっとした思い違いが大事故につながる可能性が指摘されています。

話は変わって、年末には遂に政治と金の問題に検察のメスが入り始めました。リクルート事件は 35 年前ですが、あの時は大きな改革が始まるきっかけとなりましたが、今回の‘事件’はその時に整備された筈の法律が実は大きな抜け道が組み込まれていて、それを使った‘裏金’が使途不明。30 年前に企業などからの献金を防ぐために設置した国からの政党助成金があったのに宴会費の名目で会費を企業などから集めた大部分がこの使途不明の裏金になったらしいのです。今度こそ隙のない立法が望まれるところです。

世界をみると、年があけても相変わらず争いが続いています。中東で続くこのパレスティナとイスラエルの紛争は 70 年以上も続く騒乱の歴史を考えると簡単に「どっちが悪い」などと論じられないと前回も書きました。けれど今や犠牲者数は圧倒的にパレスティナ人が多いようで、世界の非難はイスラエルに向けられています。複雑な事情があるとは言え、間違いなく大勢の人々が毎日死傷しています。何度も繰り返しますが「戦争はイヤだ。なんとしても一刻も早く止めねば」という思いが募ります。

戦争といえば個人的な話になり恐縮ですが、1939 年生まれの筆者は 1945 年の終戦時‘国民学校’1 年生でした。あの 8 月 15 日はよく晴れた日で昼ごろは疎開先の家の庭で遊んでいました。縁側の奥から「玉音放送」が聞こえたのですが内容は全く分かりませんでした。母が涙を流していたのは覚えています。東京で住んでいた借家は空襲で全焼しましたが、東京で仕事をしていた父は焼け残りの家を借りることができ、9 月には帰京し小学校に編入しました。余談ですがネットで調べると 1941 年に初等教育学校は明治以来の尋常小学校から国民学校に名前を変えたようですが、国民学校令は 1947 年まであったと書かれているので筆者の東京で入った学校は何と呼ばれていたのか。帰京列車の窓から見た焼け跡、広い操車場(宇都宮)に多数横たわる焼け爛れた客車や貨車の不気味な橙色の錆が強烈な印象で今でも目に浮かびます。そしてやっと着いた上野駅で暗い地下道に座り込んでいた大勢の‘浮浪児’たち。終戦の年の 4 月に入学した筆者の世代は前後の世代に比べてぐんと人口が少ないのです。戦災で亡くなった人たちや両親を亡くして戦災孤児になって亡くなった子供たちも大勢いたのでしょう。

繰り返しでまたまた恐縮ですが、「やられたら、やり返す」を繰り返すのが戦争です。「攻撃されたら‘防衛’のため敵地を攻撃する」のが「やられたら、やり返す」なのです。野生動物が生き残れるのは喧嘩したときどちらかが諦めて逃げ出すと‘勝者’は‘敗者’を追いかけないという知恵があるといわれます。このままでは人類は滅びるのでしょうか。今回の能登地震は我が国が世界でも稀な‘天災の国’であることを改めて思い知らされました。そういう国が最も大きな‘人災’である戦争を起こさない、起こさせない、また消極的ながら巻き込まれないということです。1945 年の終戦以来、78 年間我が国は平和を守ってきたことを絶対忘れず、これからもずっとこの Pax Japonica が続けられる

事を切に祈るばかりです。それにしてもこの山ばかりの小さな天災国がこれまで何度も天災人災を乗り越えてここまで来たのは全く大したものだと思う今日このごろです。

さて次回の定例会は、1月27日(土)を予定しています。昨年9月に「食、食品容器包装の安全性及び新基準（現状及びニーズ変化とその対応）」という話題でお話頂いた松坂菊生氏に再びご登場願ひ前回の話の続きで食品関係のプラスチックなどのお話を願ひすることになりました。

以下は松坂氏から頂いた要旨です：

タイトル「サステナブル・パッケージング」、

第1部 「食品ロス」:

食品ロスの発生要因としては、供給サイドの問題と、消費者の行動が挙げられます。供給チェーン上の問題や消費者行動、さらに意識改革などを通して、食品ロス削減対策の具体的なアクションを起こすことが求められます。

食品の賞味期限と消費期限の理解も重要です。正確な情報を基に、食品を適切な期間に消費することで、食品ロスを減少させることが可能とされています。さらに長年の商習慣であった所謂「三分之一」ルールも見直されました。食品包装容器の適切な設計変更も進められています。また、家庭における食品ロス対策も重要です。消費者として、ロス削減を意識した取り組みが、家庭での食品ロスを最小限に抑えるキーになります。

外食時には、食べ残した食品を持ち帰るための、ドギーバッグの活用が、食品ロス削減の手段として提案されています。余剰食品の再利用や食品の寄付もフードバンクを通じて行われ、社会的な協力が進められています。

しかしながら、食べ残り食品の持ち帰りや、食品の寄付には法的な課題もあり、これらの取り組みを円滑に進めるための法的な検討が、現在、進められています。

第2部 プラスチックと環境問題:

国内外において使い捨てプラスチック製品の廃棄による環境汚染が問題になっています。これに対して「プラスチック資源循環促進法」または、「プラスチック新法」と呼ばれる法令が、2021年(令和3年)に制定公布され、2022年から施行されました。この法令は、*プラスチック使用量の削減 *リサイクルの促進 *プラスチック資源循環の推進 などの施策が盛り込まれています。「プラスチック新法」にいたるまでの間に、国内で進められてきた施策と、プラスチック廃棄物の最近の状況のデータを示します。次いで、*プラスチックのマテリアル・フロー、*PET樹脂のリサイクル、*PET以外の(ポリオレフィン系プラスチック)の状況、につき触れます。循環型経済への移行を進めるEUは、使い捨てプラ製品の削減などの目標を盛り込んだ政策「プラスチック戦略」を採択しました。この戦略の中には、①企業にとりプラスチックのリサイクルが利益あるようにする、②プラスチック廃棄を抑制する、③世界で同様の変革を促す、等が含まれます。これらの内容の一部は「プラスチック新法」に反映されています。

今後、バイオ・プラスチックは環境負荷を減少させるために、期待される素材です。現状について瞥見します。最後に、我国の国際的に達成を表明した課題について触れます。

バイオテクノロジー標準化支援協会 (SABS) 第 122 回 定例会

日時: 2024年1月27日(土) 13時~17時

場所: 八雲クラブ(東京都立大学同窓会) 渋谷区宇田川町 12-3 ニュー渋谷コーポラス 10 階

話題: 「サステナブル・パッケージング」、

提供: 松坂菊生 SABS 理事・元広島国際学院大学教授

定例会会場八雲クラブへの道順: 渋谷駅北口交差点から井の頭通りの坂道の右側を東急ハンズ
の看板目指して上ります。ハンズの手前で右の急坂を登って行き、坂の途中で左に曲がりまた少し
坂道を行き登り切った所で新しいパルコ高層ビルの反対側にある古い高層マンションがニュー渋谷
コーポラスで、入口の階段奥のエレベーターで 10 階に上り直ぐ左隣の部屋が八雲クラブです。

定例会は、現在、原則として毎月第4土曜日に開催しています。7月と8月と11月はお休みです。

なお会場の都合で第4土曜日ではなく他の土曜日となることがありますがその場合はお知らせします。

今年は2月24日(土)と3月30日(土)に会場を予約してあります。なお3月は例外的に第5土曜日です
のでご注意ください。

このジャーナルはバイオテクノロジー標準化支援協会(SABS)会員だけではなく、広い意味で
のバイオテクノロジー関係の方々にも配信しています。現在、このジャーナルを読んで下さる方々
は600名近く居られます。殆どの方が奥山先生の関係で、先生の広がった人脈に改めて驚いてい
ますが、ぜひ読者の方々からも話題提供をして下さる方をお待ちしています。当SABSジャーナル
のホームページ https://sabs.sabsnpo.org/sabs_j/ ではジャーナルの最新号を含めたバックナ
ンバーが収録してあります。またお知り合いの方でこのジャーナルを配信希望の方が居られました
ら会員である必要はありませんので筆者のアドレス thiyama@athena.ocn.ne.jp に直接お知らせ
ください。また配信停止、新規会員登録、アドレス等の登録情報変更等のご希望やウェブサイトに関
するご意見もメールでお寄せください。 (文責 檜山
哲夫)

特定非営利活動法人バイオテクノロジー標準化支援協会

NPO Supporting Association for Biotechnology Standardization (SABS)

〒173-0005 東京都板橋区仲宿 44-2 URL:<http://sabsnpo.org>.

理事: 荒尾 進介、小林 英三郎、田坂 勝芳、松坂 菊生、小川 哲朗、川崎 博史、檜山 哲夫

監事: 堀江 肇

ネット管理: 川崎 博史、田中 雅樹